



亀田製菓 × Albirex

1996年、アルビレックス新潟さんは地域の
プロクラブとして誕生されました。
29年目の今年も、新潟の誇りを県民の皆さんと共に応援します。
—— 亀田製菓株式会社

Albirex Niigata

リーグ開幕特集

てっぺんを掴め。

2023年、掴んだ自信、抱いた確信。
2024年、PRIDEを力に挑戦が始まる。
てっぺんへ——。

撮影●井上和男(編集部)

「アルビレックス新潟レディース MF」

川村 優理

『WEリーグ』3年目の今シーズン。

アルビレックス新潟レディース（アルビ）は

若手の勢いとベテランの経験値が融合し、WEリーグカップで準優勝。

3月3日から再開するリーグ戦は3位につけアルビも「つべん」が見えている。

2年ぶりにけがから復帰した川村優理に話を聞いた。 文●大島享也（日刊スポーツ新聞社）

経験を生かして試合の流れを
コントロールする川村。チーム
になくはない存在

提供／アルビレックス新潟レディース

「目指しているのはタイトル。やってきたことは間違っていない」

つ自信もついてきて、勝敗に対しての責任をみんなが感じていることも、いい順位にいる要因だと感じています。

——昨年11月11日の今季WEリーグ開幕戦、アウェイのINAC神戸戦で682日ぶりに公式戦のピッチに帰ってきました。（※後半30分に交代出場）

川村 あの時0-1で負けていたので、勝つために何ができるかということしか考えていませんでした。試合が終わってからチームメートやサポーターから祝福されたり、一緒にサッカーをした仲間からもたくさん連絡をもらいました。今でもみんなとサッカーができる喜びはありますし、サッカーができるって幸せなんだと感じます。純粋にサッカーを楽しめている自分があるの、復帰できて本当に良かったです。

何回も辞めようと思った

——約2年間ものリハビリ生活でした。どうやって気持ちを維持していましたか？

川村 維持できていたかは分からないですけど、今回の手術が3回目で、（手術の）大体の流れも分かっていましたし、1、2回目の時は8カ月で復帰できたので、3回目もそのぐらいかなとは思っていました。でも、全然うまくいかなくて。筋力をつければいいわけでもないし、調子がいいと思っても、すぐに悪くなったり。自分自身、そういう状況に対して、気持ちのコントロールが難しく、「今日はリハビリしたくない」「もう無理」って思う日もありました。そういう時にトレーナーは自分の気持ちに気付いて、「今日はそんなにやらなくてもいいよ」と言ってくれたり。

でも、自分もそう思いながらも、一方ではやらないともやもやる自分もいて。リハビリしなければさらに良くならないんじゃないかなって思う自分もいたり。保っていたというか、そのときの気持ちに合わせたというか、「やる時はやろう」「今日はいいかなと思ったらやめよう」。

——きついリハビリを乗り越えられた原動力は？

川村 チームメート、家族、サポーターの方の声、いろんな人の声があったからこそ。やっぱり裏切れない気持ちが強かった。何回も「辞めようかな」と思いましたが、もし自分が引退をするって発表した時にその人たちを悲しませちゃうな、と。その思いの方が強かったので、諦めちゃだめだなと、何とか（気持ちが）つながっていたという感じですね。

——2年間ものリハビリは長いです。

川村 復帰できた今だからこそ思うことは、意外に早かったなと。でも、この2年間は本当に濃かったし、苦しかった。みんなが練習しているのをクラブハウスから見たり、「早く家に帰りたい」とも思いましたけど、結局、こうして今サッカーができています。本当に長いと感じましたし、この2年間があつて良かったとは思わないですけど、諦めなくて良かったんです。

——リハビリ期間で学んだことなどはあるでしょうか？

もっとやらなきゃいけないという危機感

——昨年10月14日のWEリーグカップでは準優勝。現在冬季中断中のWEリーグでも第7節を終えて、4勝1分け2敗勝ち点13で3位につけています。今季のチームの戦いについてどのように捉えていますか。

川村 監督が代わって、新しい選手も入ってきて、成績で見たいいい位置にいて、いい数字を残しているのかなとは思いますが、目指しているのは「タイトルを取る」というところなので。そうすると、まだまだやらないといけないですし、今の成績で満足している選手はいないと思います。だからこそ練習でも、高いレベルを求め合ったり、もっともっとやらなきゃいけないという危機感を持ちながらやっているのだと思います。

——まだまだ発展途上ということですね。

川村 そうです。年末のセレッソ大阪ヤンマーレディース（12月30日、0-1）戦も負けてはいけない試合でしたし、そういった難しい試合を取るチームが強い。あの試合で負けてしまうということは、まだ自分たちの力が足りないということ。一方で、やってきたことは間違っていないと思いますし、いい部分もある。もっと強いチームに、もっといいチームにしていかなければいけないんです。

——それでもWEリーグでは上位をキープしています。

川村 みんなが前向きに練習、試合に取り組んでいることが要因の1つだと思います。それから、今やっているサッカーに対して、結果がついてきていることで少し

Kawamura Yuri

川村優理（かわむら・ゆうり）●1989（平成元）年5月17日生まれ、新潟県出身。小学2年でサッカーを始め、2002年、中学1年でアルビレックス新潟レディースに加入。13年ジェフユナイテッド市原・千葉レディース、14～16年ベガルタ仙台レディースに所属。17年にアルビに復帰した後、ノースカロライナ・カレッジへ移籍して右ひざをけが。19年アルビに復帰。その後もけがに泣かされ、2年近いリハビリを経て23年11月にWEリーグデビュー。05年U-17日本代表。日本代表（なでしこジャパン）では国際Aマッチ32試合出場。恵まれた体格を生かしたハードワークで中盤を攻守で支配するMF。身長168cm、体重58kg。背番号5。

撮影●井上和男（編集部）





センターから相手ブロックの間を打ち抜く澤田一毅(2年)。学館の多彩な攻撃力が光った



大会3連覇で通算14回目の優勝。まずは県の1冠をつかんだ



高い打点からスパイクを決めた齋藤。エースの貫禄を見せつけた



相田は絶妙なスワークで新発田中央のブロック陣に的を絞らせなかった

第44回 新潟県 高校1・2年生大会



Men 男子

2024.1.20.21.29

東京学館新潟が3連覇 新発田中央をフルセットで下す

勝負どころで地力の違いを見せた東京学館新潟が、初優勝を狙った新発田中央をフルセットで下し、大会3連覇(コロナ禍で中止となった第42回大会を挟む)を果たした。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田) 文●石井拓馬(フリーランス)

男子 決勝 東京学館新潟 2 1 新発田中央

25 - 11
21 - 25
25 - 21



フトからOH齋藤寿明(2年)がスパイクを打ち込み、フルセットに及ぶ激戦に決着をつけた。

今大会で初めてセットを失った。第1セットは25-11と大差だっただけに、キャプテンの相田悠一郎(2年)は「勝ち急いでしまった」。齋藤も「正直、気が緩んだ」とそれぞれ反省を口にした。

運命の第3セットは中盤まで一進一退の攻防を繰り返したが、息を吹き返したエース齋藤が得点を重ねた。最大あった5点差も終盤には2点差まで詰められたが、22-20からOH栗林颯太(1年)のサービスエースで流れを食い止め逃げ切った。試合後、渡辺健太郎監督は「ディフェンスもブロックも粘り強くやってくれたし、攻撃もそんなに悪くなかった」と振り返った。

1月の春高で16強入りを経験した主力メンバーが多く残り、チームは昨年より「粘り強さ」を求める。「春高を経験できたのは大きい。だからこそもう1回あの舞台でやりたい。インターハイ、春高に向けてもっと強くなる」(相田)

初優勝を狙った新発田中央は犬井康誠(2年)を中心とした高い攻撃力を見せた。今後の巻き返しを期待したい。

準決勝

新発田中央 2 0 関根学園

25 - 15
25 - 16

東京学館新潟 2 0 佐渡

25 - 16
25 - 13



諏訪喜太(2年)がスパイクを決める。新発田中央が関根学園を圧倒した



高さに勝る学館が、佐渡のコンビバレーを完璧に抑え込んだ

池田拓史

オイシックス
新潟アルビレックスBC社長

テーマはプロ野球で地域貢献。 1シーズンで5人はNPBに送り出したい

新潟アルビレックスBCが、今年から「オイシックス新潟アルビレックスBC」と球団名を変えて、独立リーグのBCリーグから日本野球機構（NPB）のファーム戦、イースタンリーグに戦いの場を移す。17年間、新潟の球団経営を担ってきた池田拓史社長が新しいステージに向かう意気込みを語った。文●佐藤一朗（編集部）

——オイシックスとしての1年目が始まります。常々重視されていたスポンサー企業への反応はいかがでしょう。

池田社長 おかげさまで支援の継続、増額等をしていただいたお客様が多数いらっしゃいます。BCリーグ時代から17年間応援しているチームがイースタン・リーグに、ということに驚きながらも、いい話だと思ってくださる方がほとんどですね。新規で「ぜひ応援したい」と話してくださるお客様も。興味を持ってこちらの話を聞いてくださいます。ありがたいです。

——球団名が「オイシックス」になった効果や影響は？

池田社長 アルビレックスのグループでネーミングライツを取り入れたのはうちが初めてです。皆さん少なからず驚かれたのではないのでしょうか。戦うステージが上がる中、新しいスポンサーさんの力も借りて、今までと違うスキームでチャレンジする。それ自体には楽しみだ、というお声をたくさん

さん聞きます。今回のイースタン・リーグ参加のようなタイミングが来た時は、今までとは違う事業をやらないと一筋縄ではないかと思っていました。ネーミングライツは、その時にもしかしたらこういう手法があるかもしれないと考えていたんです。

——カードとして持っていたと？

池田社長 自分の中では10年くらい前から構想としてありました。韓国プロ野球のキウム・ヒーローズはネーミングライツ方式で経営している唯一の球団なんです。たばこ会社、タイヤ会社、証券会社と、ネーミングライツでスポンサーを獲得しています。上のステージにチャレンジするとなると、事業規模を今までの2、3倍にしなければ、と想像していました。大きくブレークスルーするためには新しい手法を取り入れなければならぬ。ネーミングライツは選択しうると注目していました。いつか使える時が来るかもしれない、しかもかなり有力な方法だと温めていました。今回、ご

縁もあって、オイシックスさんと協議の中で実現しました。勝負をかけるというのか。——切り札の1枚を切ったわけですね。まだカードはありますか？

池田社長 ないわけじゃないのですが（笑）。今のタイミングでは特に。

——目指す事業規模は6億円ほどというお話ですが、スポンサー獲得などの達成状況はどうですか？

池田社長 まだ到達しているわけではないです。一步一步近づいているところなんです。大変な作業なことは分かっています。なるべく早く実現できるようにコソコソとやります。短期間で安定的な球団経営の形を作るのが私のミッション。今はそこに力を注いでいます。

——BCリーグで培った球団経営は、生かせるのではないですか？

池田社長 確かに経験はあります。とは言っても、やはり違いが大きいですね。まず選手の数。今までは26、27人だったのが、40人を超えてくる。用具代や遠征費など付帯する経費も変わってきます。試合数が倍の140試合。ホームでもビジターでも3連戦が基本です。ビジターの6連戦もあります。そうすると泊6日、6泊7日になる。その間の宿泊先、食事、クリーニングなどは未知の領域になってきます。遠征行程1つとってもまったく別次元。いろいろな意味で、高いレベルで構築しなければならぬ。それに選手を育成する環境という点で、設備投資もしなければなりません。

——特に重要な設備投資は？

池田社長 最優先は室内練習場です。ビジターには全員連れていくわけではない。6連戦でも32、3人いれば十分なんです。新



写真提供／日刊スポーツ新聞社

今季のチーム首脳陣。左から野間口貴彦チーム強化アドバイザー兼投手コーチ、池田社長、橋上秀樹監督、武田勝投手コーチ

潟に残留する選手がいるとなると、当然、彼らが練習する場が必要になる。シーズンオフになると特に室内練習場が必要です。昨秋から検討していますが、簡単にはできません。球団として投資余力がどれだけ持てるかを精査している段階です。

——試合現場で、結果だけでない部分のファンへの提供、アプローチについては。

池田社長 いろいろな見方がありますが、興行としてホームゲームが楽しいという状況を作ることの優先順位が高いと思っています。NPBのファーム戦というのは地方では魅力的なコンテンツです。楽しんでもらうために、例えばスタジアムでの飲食の提供やイベントのレベルをBCリーグ時代より上げたいですし、上げなければならぬ。オイシックスさんとも会議を重ねています。特に飲食は。野球は間のスポーツだと思っんです。インギンや打席の合間があることで、お客様もメリハリをつけて観ることができ。その中で飲食のウェイトは大きいです。そこはオイシックスさんの力を借りながら取り組んでいきたいです。おいしいフードに楽しいイベント、そこにチームの勝利が重なればより魅力的なコンテンツになると思います。

——チームは今まで以上に、質の高い選手を育成してNPBに送り出すことが求められると思います。

池田社長 外国人選手やNPB在籍経験のある選手の復帰、ドラフト指名も含めて、1シーズンで5人はNPBに送り出したいと思っています。私たちと、（ウエスタン・リーグに参加する）静岡の「くふうハヤテベンチャーズ静岡」さんは、最もNPBに近い環境の球団になるわけです。上を目指



昨年12月8日に行われた新入団選手会見。ここからNPBに何人が上がれるか、球団の手腕が問われる

写真提供／日刊スポーツ新聞社